

《書 評》

Gillian Clark, *Late Antiquity: A Very Short Introduction*

Oxford: Oxford University Press, 2011, pp. xvii+128.

南 雲 泰 輔

1

1970 年代以降、多文化主義を思想的背景とする独特な時代概念・研究領域として英米の学界を席卷してきたいわゆる「古代末期」(Late Antiquity) 研究であるが、学説史上の画期をなした P. Brown の名著『古代末期の世界』刊行 (1971 年) 後の 40 年間の進展はまことに目覚ましく、今日では 1970 年代当時の Brown が表明した認識のみをもって「古代末期」を語ることは困難なものとなった。「古代末期」研究は、旧来のローマ帝国衰亡論を「消えゆくパピルス文書」と揶揄し、あらゆる意味においてそれにとって代わるべき学説として自らの存在意義をセンセーショナルに喧伝し、もって江湖の喝采を博したことは周知のごとくである。しかしながら、かかる衰亡論批判のみによってその意義を主張しえた 1990 年代は既に去り、21 世紀最初の 10 年間には「古代末期」研究の基本姿勢に対する厳しい批判が提起され、「古代末期」研究の側もこれを看過しえぬものとして受け止めた。これらのことは現在の学界情勢の流動化を惹起せしめ、今や「古代末期」とは何か、その学説としての内実が改めて問われるべき新しい段階へと移行したとみられる¹⁾。

かかる現状に照らして、先般、まことに時宜をえた書物が刊行された。それが、ここに紹介する G. Clark の近著『一冊でわかる「古代末期」』である。著者 Gillian Clark は、2010 年まで英国・ブリストル大学で古代史を講じ、現在は同大学名誉教授。主要業績としては、*Women in Late Antiquity* (Oxford, 1993) や *Christianity and Roman Society* (Cambridge, 2004) があり、これらの著書のタイトルから窺知されるごとく、「古代末期」におけるキリスト教と女性とを主たる関心の対象とする女性研究者であり、キリスト教教父アウグスティヌスや新プラトン主義哲学者イアンブリコス及びボルフェリオスに関する研究でも知られる (これらを扱った論考は *Variorum* 論集 *Body and Gender, Soul and Reason in Late Antiquity* (Farnham, 2011) に収録)。周知のごとく 1970 年代以降の「古代末期」研究の特徴の一つはその社会的・文化史的性格であり、伝統的な歴史学が関心を向けてこなかった対象を積極的に取り上げる姿勢に見出されるが、かかる学問的特徴と著者の関心とを照らし合わせるならば、『一冊でわかる「古代末期」』の書き手として著者が選ばれた理由も首肯しうるように思われる。

2

本書は全体で8章からなり、「古代末期」とは何であり、いつ、どこを対象とするものであるかを概観する第1章「古代末期とは何か、またいつのことか？」は、本書のなかで最も重要な章である。但し、本書の総論たるべきこの第1章の内容は、本書全体の評価とも深く関連するため、先に第2章から第8章までを概観したのちに立ち返って、その内容を検討することが適切であると思われる（本書評3で後述）。

そこでまず第2章からみてゆくことにするが、第2章「帝国を支配する」では、平和と秩序の維持を基本的義務とするローマ帝国の統治システム及びそのなかでの皇帝権力の性格が、公的見世物・官僚制と教育・公正の観念といった観点から説明される。本章の末尾で触れられている同時代人には極めて不評であった6世紀のカップパドキアのヨハネスによる行政改革について、もしそれが成功していたならば、「ビザンティン」という言葉は、今、効率的で透明な行政を意味していたであろうとの一文は、いろいろの想像を喚起させて興味深い。

さて、かかる平和と秩序の維持は、何らかの権力行使を伴わずしては不可能なものであるが、そのゆえにともいえるのか、「古代末期」は国家権力による暴力が残酷な刑罰として認められていたことが知られている。第3章「法律と福祉」では、かかる種の暴力的な権力行使と、隣人愛や悪に報いるに善をもってなすといったキリスト教の教えとについて、キリスト教徒の官僚たちがどのように折り合いをつけていたか、逆に彼らはキリスト教の倫理は帝国支配とは相いれないという議論にどのように反論しえたか、また、キリスト教徒による慈善活動について、アウグスティヌスの言葉やローマ法の法文を引きつつ考察する。この「古代末期」におけるキリスト教の拡大発展とそれが人びとのアイデンティティ形成や社会に及ぼした影響については、続く第4章「宗教」でより詳しく論じられる。著者によれば、「古代末期」の最も顕著かつめざましい特徴の一つは宗教上の変化であり、そこでは特にローマ及びポスト・ローマ社会を変容させたキリスト教の三つの革新——共同体の指導者としての司教、修道生活の試み、皇帝による正統信仰強要への支援——が発生した。但し、20世紀後半までとは異なり、キリスト教国またはポスト・キリスト教国に生きる歴史研究者であっても、単にキリスト教の教義や実践に限らず、現在ではユダヤ教、イスラム教、「異教」、あるいは自らと神との関係についての考え方といった、より一般的な問題にも興味をもたれるようになっているという指摘は、狭義のキリスト教史研究とは異なる「古代末期」研究者独自のアイデンティティの表現として重要である。第5章「救われるために我らは何をなすべきか？」は、著者の新プラトン主義哲学に関するこれまでの研究成果を取り込んだ章で、章の前半では、アウグスティヌス、マダウラのマクシムス、ティールのポルフュリオス、イアンプリコスらの思想が簡潔に紹介されるとともに、「古代末期」の社会革命としてのキリスト教修道生活、柱頭聖人シメオン、聖性と聖遺物などが言及される。後半では、「古代末期」の宗教の多様性を示す特別のケースとして384年のローマ市の状況が描写される。

第6章「野蛮」は、ローマ帝国と蛮族との関係を扱う。まず史料の問題が論じられ、当該時期における二者間の関係を考えるうえで重要な二つの軍事的衝突（378年のアドリアノープルの戦い及び410年のローマ市劫略）、その後の蛮族国家について記述される。本章の記述のなかで重要なのは、20世紀後半において、ヨーロッパ及びアメリカの多文化主義の経験と希望とに影響を受けた、対決（confrontation）よりも順応（accommodation）を重視する「ユーロバーバリアン」（Eurobarbarian）モデルが提示されたこと、またかかるモデルに対して、暴力的対決の存在を重視する「バーバリック・バーバリアンズ」（barbaric barbarians）説が近年再び提起されているとの記述である。第7章「青銅の象：古典古代文化とキリスト教文化」は、6世紀にイタリアを支配した東ゴート族の王テオダハドが、ローマ市長官に向けて青銅製の象の像について書いた手紙の引用を導入として、蛮族・古典古代文化・キリスト教文化のそれぞれの間に生じた関係が論じられる。

最終章である第8章「決定的な変化？」では、まず「古代末期」の終期に属する7世紀の歴史が、ヘラクレイオス帝治下のローマ帝国の対外関係とアラブ・イスラム勢力の勃興が概観され、続けていわゆるピレンヌ・テーゼに関する歴史研究者・考古学者らの議論が紹介される。そのうえで、「『古代末期』は、制限と喪失の叙述（a narrative of limitation and loss）として提示されうる」と述べられ、当該時期に「古代末期」の世界が経験した否定的事象が列挙される。すなわち、ゲルマン諸民族によるローマ帝国西部の没落、アラブの侵入によるローマ帝国東部領域の喪失、ローマ人による地中海交易の制限、社会の停滞と階層化、古典古代都市の規模の縮小と衰退、村落と大土地所有者の成長、古典教育の消滅、等々。また著者は、「古代末期」のキリスト教徒の文脈においては、「異端」が、危険な間違った選択であり、正統信仰と個々人の精神を脅かす誤り導かれた信仰を意味したことを指摘する。しかし、にもかかわらず著者によれば、希望のしるし（signs of hope）は存したという。フン族の王アッティラとの交渉は可能であった。「蛮族」はローマ人のなかに定住し、ローマ人と通婚しえたし、自らの王と法典を具えた共同体を形成しえた。キリスト教・ユダヤ教徒・イスラム教徒は神学・哲学・医学を議論しえた。「異端的な」解釈は「古代末期」のキリスト教信仰のなかに生き残った。そして著者はいう、「『古代末期』に関する研究は、ローマ人と蛮族、異教徒・キリスト教徒・ユダヤ教徒・イスラム教徒、正統信仰と異端の信者、勝利と衰退といったごとき鮮明な区別と明確な境界線（frontiers）に挑戦しているのである。」

以上の多岐にわたるテーマを扱った各章に加え、文献案内・年表・索引が付される。文献案内では、本書の内容に関係する若干数の基本文献が著者による短いコメント付きで紹介される。全て英語文献であり、フランス語やドイツ語など他言語の文献は挙げられていない。年表は、マルクス・アウレリウスの登位した161年から、シャルルマーニュが戴冠した800年までの範囲を収める。但し、記載事項のほぼ全てが皇帝在位年・歴史的人物の生没年や事件の発生年であり、「古代末期」研究の関心に沿った宗教上あるいは社会上の持続的な変化を表現するごとき年表とはなっていない。

3

かくのごとく 1970 年代以降の英米学界における「古代末期」研究の現状における到達点を示した本書は、総花的記述ゆえか若干の散漫さは感ずるものの、その簡便さとも相俟って、以後当該時代の研究を志す者がまず繙くべき基本書の一つとなるであろう。特に、1970 年代以降の「古代末期」研究の特徴を簡潔に概観する第 1 章「古代末期とは何か、またいつのことか？」は、本書評 2 において先述したごとく「古代末期」について簡潔な見取り図を提供せんとする本書の目的に照らし最も重要な章であり、その内容からは、「古代末期」研究の基本姿勢を学ぶことができるばかりでなく、それが今後解決を試みねばならぬであろう、いくつかの課題をも察知することができるのである。

第 1 章での著者の記述によれば、半世紀前には「古代末期」なる用語は、4 世紀初頭から始まり、西欧では 5 世紀後半、近東では 7 世紀後半に終わりを迎える移行（transition）の時期を示す呼称としては、滅多に用いられることはなかったという。当該時期は、古典学者には「後期ローマ」として、ビザンツ学者には「初期ビザンツ」として、そして中世史家には「初期中世」として、それぞれに認知されていた。しかし、この 50 年間の研究の進展により、「古代末期」の境界は時間と空間とにおいて拡張せしめられ、多くの学問領域——古典学と中世研究、歴史と考古学、言語学と文学、神学と視覚芸術——が出会う場となったのである。

このように著者は「古代末期」の学際的領域としての積極的意義を述べたうえで、「古代末期」がいかなる時代であったかを、「フロンティア」を定義することによってではなく「コントラスト」への着目から説明する。それによれば、「古代末期」の世界では、新しいエスニック・グループが登場し、あるいはローマ帝国の人びとと闘争して、ローマ帝国の権力は脅威にさらされた。新しい宗教運動が伝統的な宗教と交わり、あるいは競合して、キリスト教会の指導者たちは共同体のなかで新しい役割を担った。神に委ねられた生活という新しい考え方が、家族・都市・国に奉仕するという古い理想に挑戦した。権力は新しい場所に移り、ラヴェンナに在したローマ皇帝は 410 年にローマ市が蛮族に劫略されるのを座視し、コンスタンティノープルに在した皇帝も心を動かされることはなかった。才能ある者には機会が開かれる一方、古い家系・貨幣、伝統的な教育と価値観はなお重視され続けた。つまり、著者によれば「古代末期」の世界とは、それ以前と比べてあらゆる意味で新しい要素が生じた時代であったというのであり、それゆえに著者は「古代末期が 20 世紀末と 21 世紀初頭のヨーロッパ・北アメリカの研究者を魅了したことには何の不思議もない」と断言する。

他方、ギボン以来のローマ帝国衰亡論に対しては、著者は「歴史家たちは現在、それが正しいかどうかを問うている」と述べ、ローマ帝国は確かに没落したけれども、ローマ文化といった場合には、帝国西部ではローマ崩壊後も生存していたし、帝国東部では文化のみならず帝国権力もまた存続していたとしたうえで、結局のところ、衰退かそうでないかという判

断は、「研究者が探究する対象・場所・時期におしなべて依存するものである」と記す。これは、後述するごとく「古代末期」研究がこれまで衰亡論に対して示してきた強い拒絶の姿勢とは異なる立場の表明であり、瞩目に値する記述である。

また著者は、近年の研究の進展により「古代末期」の境界が拡大し、時代区分が一層流動的となっていることを率直に指摘する。始期としてはマルクス・アウレリウスの2世紀半ば、セプティミウス・セウェルスの3世紀初頭、ディオクレティアヌスの3世紀末、そしてコンスタンティヌス1世の4世紀初頭と4つの候補が示され、終期は西欧の状況変化に基づき800年頃とするが、この年代がビザンツ史にとっては重要な転換点ではないことも同時に指摘される。そして再び、次のごとく述べる。「過去の社会のなかの何を認識し、人間生活のなかで何が最も重要あるいは興味深いと見出すかは、歴史研究者のそれぞれによって多様なのである。」こうした主張は「古代末期」研究の多文化主義から発するものとみることもあるいは可能であろうが、「古代末期とは何か、またいつのことか？」という本章の主題に対して、また「古代末期」研究の全体像を簡潔に伝えるという本書全体の課題に対して、十全な回答たりえているか否かは、疑念の余地の残るところであろう。

それにしても、本書を一読して驚くべきことは、何よりも本書の冒頭において、「古代末期はローマの没落 (fall) とローマの生存 (survival) とをみた。」との一文が配され、ローマ帝国の「生存」に並んでその「没落」が明瞭に記述されていることである。かつて「古代末期」研究の第一世代がローマ帝国の「衰亡」を強く忌避し拒絶しようとしたことを想起するとき、「古代末期」の初学者に向けた基本書としての性格を持つ本書において、「没落」もまた他ならぬ「古代末期」の出来事であったとの記述がはっきりとなされたという事実は、画期的であるとともに、重い意味を持つといわねばならない。なぜならばこのことは、英米学界における「古代末期」研究の担い手が第二、第三世代へと漸次代替わりしていることを示すばかりでなく²⁾、21世紀最初の10年間に「古代末期」研究の「衰亡」概念忌避に対して厳しい批判がなされ、かつは「新しい衰亡論」が相次いで提起されたことによって、今や「古代末期」研究の「変質」あるいは「転向」と称して差し支えないほどにその主張の相対化が進み、「古代末期」研究の論者らもローマ帝国の「没落」を事実として受け入れざるをえなくなったという現状を如実に示すものとみることができるからである。

4

我が国でも、近年、「古代末期」研究者・足立広明氏の、第21回国際歴史学会議(2010年8月、オランダ・アムステルダム)での報告概要である論考「諸帝国の衰亡」³⁾が、ローマ帝国衰亡論そのものへの批判ではなく、衰亡論が「文明」をキータームとして語ることに對しての批判へとトーン・ダウンしてしまっていることのなかに、かかる英米学界の傾向と同様のものを見出すことができるように思われる。但し、この論考中で足立氏は、「古代末

期」研究に対する批判としての「新しい衰亡論」を取り上げ、これに対して、さらに再批判として以下の三点の問題提起を行なっている。すなわち第一に、ローマ帝国東部の人びとの「ローマ人」意識に未解明の部分が多いこと。第二に、「新しい衰亡史観」の観点そのものに問題が孕まれていること。第三に、氏自身の聖テクラ研究に基づくならば、帝国東部における「古代末期」の地域文化の継続と変容を主張しうること。これらの問題提起は、「古代末期」研究の評価と今後の展望を考えるに際し、本書評で取り上げた Clark の著書の内容とも呼応する部分があるため、最後に簡単に検討しておきたい（なお、第一の問題提起に関しては、個別の研究成果をもって応えるべき問題であり、残念ながら本書評で応答することはできない⁴⁾）。

第二の問題提起について、足立氏は「新しい衰亡論」の観点には「捨てきれない伝統的な視点を自明の前提としているために生じた反発もないまぜになっている」として問題視する。文面から直接窺知することの難しい研究者の感情面を取り上げて問題とすることは、筆者にはやや躊躇われるところがあるけれども、元来多文化主義を標榜していたはずの「古代末期」研究が、こと衰亡論に関しては実に辛辣な排他的姿勢を示すことは、その思想と著しく乖離した行動であるように思われてならない。もっとも、本書評で取り上げた Clark の著書が示すごとく、今日では「古代末期」研究もローマの「没落」の事実を明確に認知・評価するようになっているのであり、かかる学界の趨勢に徴する限り、十年一日のごとく衰亡論批判のみを繰り返すことの意義は、今後急速に薄れていくものと展望される。本書評冒頭でも述べたごとく、むしろ現在の「古代末期」研究に求められているのは、「古代末期」概念の内実そのものに関する議論の深化なのであって⁵⁾、近い将来「日本人自身の手になる西洋古代末期概説書⁶⁾」が世に問われる場合にも、かかる点を十分に踏まえたものとなることが切望されるであろう。

第三の問題提起について、足立氏は考古学者 B. Ward-Perkins Jr. がローマ帝国西部の「文明の崩壊」を「新しい衰亡論」として主張したことに対して⁷⁾、ローマ帝国東部における「地域文化の持続と結晶化の過程」の事例を対置し、しかも帝国西部でもこれと同様の事例は存在したと推測して批判を試みる。但し、ここで足立氏は推測の根拠となる帝国西部の具体的な事例を挙げていないため、その妥当性を検証することは残念ながら不可能なのであるが、加えて氏の Ward-Perkins Jr. に対する批判にも、若干の無理があるように思われる。なるほど氏の指摘するごとく Ward-Perkins Jr. の「文明」理解に難点があるとしても、もとより「文明」の含意は Ward-Perkins Jr. の述べるごとき理解にのみ限定されるわけではないからであり、従って彼の「文明」理解のみをもってその意義なしと断ずるべきではないと思われるからである。また足立氏は、欧米の研究者とは異なる「日本人としての視点」というものを考えようとする場合、「その日本人としての視点というものの自体がすでに多文化のなかのひとつなのだ」とも述べている。しかしながら、かかる考え方そのものが、既に述べたごとき「古代末期」研究の思想的背景をなす多文化主義を基盤としなければ生じえない考え

方であることは十分に注意されねばならない。なお、足立氏は1970年代以降の「古代末期」研究の「隆盛」を示す成果として『古典遺産の変容』（米国・カリフォルニア大学出版局）と『ローマ世界の変容』（オランダ・ブリル社）の二つを挙げるが、後者をいわゆる「古代末期」研究に含めうるか否かは慎重な判断が必要であろう⁸⁾。

註

- 1) 以上の展開については、南川高志編「ローマ帝国の『衰亡』とは何か」『西洋史学』234, 2009年, 149-161頁や戸田聡「ピーター・ブラウンの古代末期理解をめぐって: 訳者あとがきに代えて」P. ブラウン（戸田聡訳）『貧者を愛する者: 古代末期におけるキリスト教的慈善の誕生』慶應義塾大学出版会, 2012年, 253-284頁を参照。関連して以下の拙稿をも参照。南雲泰輔「英米学界における『古代末期』研究の展開」『西洋古代史研究』9, 2009年, 47-72頁。南雲泰輔「『古代末期』研究と考古学をめぐる一動向: Luke Lavanと『古代末期考古学』」『古代史年報』8, 2010年 a, 29-44頁。南雲泰輔（紹介）「A. Cain & N. Lenski eds., *The Power of Religion in Late Antiquity*, Farnham, 2009」『史林』93-3, 2010年 b, 464-465頁。南雲泰輔（書評）「Raymond Van Dam, *Rome and Constantinople: Rewriting Roman History during Late Antiquity*, Texas, 2010」『西洋古代史研究』10, 2010年 c, 115-127頁。
- 2) 「古代末期」研究の新世代については、筆者自身、まだその動向を正確には捉えきれていないが、さしあたり、足立広明「シフティング・フロンティアーズ VII: 海外学会参加紀行」『古代史年報』6, 2008年, 53-65頁や南雲（2010年 c）などを参照。但し、後者で取り上げた Van Dam にみられるごとく、新世代の「古代末期」論者のなかにも「衰亡」概念への忌避が残る例もある。
- 3) 足立広明「諸帝国の衰亡」『歴史学研究』878, 2011年, 3-8頁。
- 4) さしあたりは、井上浩一『生き残った帝国ビザンティン』講談社学術文庫, 2008年, 75-78頁などが回答となろうか。
- 5) 南雲（2010年 b）464-465頁。
- 6) 足立広明（書評）「P. ブラウン（後藤篤子編）『古代から中世へ』山川出版社, 2006年」『西洋史学』226, 2007年, 157-159頁。
- 7) B. Ward-Perkins Jr., *The Fall of Rome and the End of Civilization*, Oxford, 2005.
- 8) この点については、南雲（2009年）64-65頁を参照。

【付記】 本稿の作成にあたり、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の支援を受けた。